

## 平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会から学ぶ

－ピースあいちから 9 人参加－

ピースあいち研究会 丸 山 豊

2017 年 12 月 9 日～ 10 日にかけて立命館大学国際平和ミュージアムで「平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会」が開催され、全国から 45 名 (+α) が参加し、日頃の活動の成果と課題を論議しました。驚いたことにピースあいちからの参加者は 9 人と全体の 2 割を占めました。(ちなみに昨年開催の福島アウシュビッツ平和博物館には 3 人) 記念講演、各博物館からの報告など盛り沢山でしたが、私なりに感銘を受けたもの、考えさせられた報告を紹介します。

### 【感銘】

特に感銘を受けたのは、「尹東柱 (ユン・ドンジュ) の記憶と和解の碑」を宇治に建立した紺谷延子さんのレポートでした。尹東柱は植民地下の朝鮮出身の詩人で同志社大学で学んでいた時、1943 年に治安維持法違反、朝鮮独立運動容疑 (注 1) で逮捕され、2 年後の 1945 年 27 歳で福岡刑務所で獄死させられます。彼女が尹東柱の詩に出会ったのは今から 16 年前の 2001 年、茨木のり子の著書と国語教科書がきっかけだったそうです。すぐさま尹東柱の詩の朗読会、講演会、自主的学習会を展開し 2005 年に記念碑建立委員会の発足、呼びかけ、署名運動、各報道が行政の許可を促し、今年 (2017 年) の 10 月 28 日に除幕式に至ったのです (注 2)。たった 12 年で加害と抵抗の歴史を宇治に刻みました。

その夜、宿で同室の河原忠広さんと「治安維持法を学び直し、尹東柱の碑の前に立ち、山宣 (注 3) も訪ねたい」と話したほどです。



尹東柱の記憶と和解の碑

### 【戦争責任】

考えさせられたのは「特別企画展としての戦争責任・加害の扱い」です。ひめゆり平和祈念資料館では初めて「教師たちの教育責任」を特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」で取り上げたそうです。「あの場合はしかたなかったと、いくら言い訳してみても、それは言い訳にはならない」と痛恨の戦後を過ごした教師たち。戦争を煽り立てる今の時代への警告の特別展となったと思われます。「現在の沖縄県の教育界、教師はこの歴史をどう総括しているのか」と副館長の普天間朝佳さんと廊下で立ち話をしました。この教育責任問題は「満蒙開拓平和記念館」が抱える課題と共通する部分です。長野県の教師たちは今年も「二、四事件」(注 4) を語り、歴史に学び続けているのですから。

### 【10周年の歩み】

「中立」(両論併記の要求、意見が対立する展示はダメ) という、やじろべえ論に惑わされず、「中帰連 (平和記念館)」の松村高夫さんからは加害の歴史を語り継いだ 10 周年の報告がありました。そのぶれない姿勢に勇気づけられました。またピースあいちと同

じく開館10周年を迎えた山梨平和ミュージアム（YPM）からは10年誌『「平和の港」



YPMの10年誌

10年のあゆみ』出版までの報告（浅川保さん）もありました。この10年誌は新聞記事を年度ごとにまとめたもの、ユニークで読みやすい内容です。また今年で六回目となる「石橋湛山平和賞」の中高生の部への応募について「高校生よりむしろ中学生の方が内容がいい」と話してくれました。幅広い平和教育とクオリティの高さを感じます。

同じく10周年となるピースあいちからは、赤澤ゆかりさんが開館10周年記念誌『希望を編みあわせる』の編集について報告されました。前史から開館10年の歩みを語りつつ、運動の広がりや示す分りやすい発表でした。記念誌の装丁、編集内容もさすがピースあいち、の声も参加者から聞かれました。

### 【平和ガイド】

興味深かったのは「平和博物館ガイドの教育的機能」（立命館大学国際平和ミュージアム伊藤昭さん）です。子どもにとって来館は一過性にすぎません。その子どもたちの心に響くガイドとは、ガイドの悩みです。「子どもたちから対話を引き出す力」「展示からつながる歴史を語る力」「学校の事前学習の在り方、帰館後の発展的学習につなげる力」などガイドの課題とし、互いにガイド研修を重ね自己成長につなげているとのこと。他の博物館でも共有できるレポートでした。

### 【国際ネットワーク】



1976年ノーベル平和賞受賞の Mairead Maguire とともに  
(前列右から2人め山根さん)

かせない、世界からのエールに励まされている様子が伝わりました。野間美喜子館長も台湾初の慰安婦記念館の印象を話されましたが、「慰安婦」問題はアジアから欧米、世界へ波及しています。フィリピン、サンフランシスコの像建立はいい例です。国際平和と基本的人権の問題です。

### 【記念講演】

記念講演は「ダークツーリズムとミュージアム」と題して井出明さん（追手門学院大学経営学部教授）の戦争と平和の視点から考える新しい観光旅行の内容でした。観光学からの研究発表は初めてです。ダークとは「人類の悲しみ」を指すようですが「なぜピースで

いけないのか」との質問もありましたが、「ダーク」の定義と範囲が定まってなく、平和学との関係を深める必要があります。しかし「旅は学校」、海外に出かけると誰もが歴史を学び直すでしょう。アウシュビッツ強制収容所や731部隊罪証陳列館へ行ってみたいと思うとき、学校教育、歴史教育が問われるわけですが、講演ではこの教育問題には言及しませんでした。

今どの大学でも歴史学、社会科学に立脚しない相対化の学問が流行しています。歴史学の成果を基盤とした平和を目ざす、希望が見える観光学を今後期待したいと思いました。

### 【文化・芸術】

丸木美術館の岡村幸宣さんからは、新館の増築費用などへの5億円目標の寄付の呼びかけとアーサー・ビナードと高畑勲の対談（開館50周年の集い（注6））など興味深い報告がありました。「原爆の囃」を避けてきた高畑が丸木美術館を訪れたことは、今の日本への危機感ではないか、と懇親会で岡村さんと話しました。（岡村さんによると宮崎駿は高畑勲を尊敬しているそうです）「ホーホケキョとなりの山田くん」「かぐや姫の物語」の作風などは、むしろいわさきちひろに傾倒している（注7）と書いていましたが「原爆の囃」の重みは表現者を引き寄せる力があるのでしょうか。

### 【全体感想】

懇親会では北海道出身の立命館大学1年生の女子学生の平和への発言あり、安斎育郎さんの手品ありなど和やかで楽しいひとときとなりました。「平和を発信し創り出す」、これを参加者が共有し確認できた意義ある大会となりました。成功の裏には立命館関係者はもちろん、ピースあいちの参加者（懇親会では皆さんスピーチされました）の献身的な支えがあったこともお伝えしておきます。来年は沖縄で開催予定とのこと。ひめゆり平和祈念資料館での再会を願って解散しました。



ピースあいちの参加者たち

### 【追記】

各館が抱える問題、展示における加害・抵抗、戦争責任の扱い、学校教育との関係など多くの方といろいろな話を交わすことができました。課題も見えてきました。一つはノグンリ、北アイルランドなどで世界的に展開されてきた平和博物館ネットワーク運動にどう関わるのか、です

国内に眼を向ければ、来年度の「明治150年史観」（明治時代礼賛論）を批判・克服する力をつけるため「歴史を学ぶ」ではなく「歴史に学ぶ」ことなどがあげられます。「語り継ぐ」とは、未来を共に創る平和・歴史認識につながります。憲法問題は歴史認識問題に直結してきます。

会場で開催中の儀間比呂志の版画展、立ち寄った大徳寺大仙院、龍安寺、みな歴史の深さが伝わってきました。やはり京都はいいですね。

.....

注1：官憲は、朝鮮独立運動は、治安維持法第一条の「国体の変革」にあたり、かつ第五条の「その目的たる事項を宣伝し・・・」に違反するとした。

注2：記念碑建立委員会は記録誌『詩人尹東柱の想いをつなぐ記憶と和解の碑』（2017.10.28）を発行した。

注3：山宣とは労農党代議士山本宣治の愛称。1929年3月治安維持法改悪反対のため上京し右翼に刺殺される。宇治に大山郁夫の揮毫で「山宣ひとり孤塁を守る、だが私は淋しくない、背後には大衆が支持してゐるから」の墓碑がある。

注4：二。四事件とは1933年2月4日を皮切りに、長野県で自由主義教育、信州白樺教育に熱心な教員が治安維持法違反として検挙された事件のこと。「教員赤化事件」とも言われる。この事件を契機に信濃教育会は満蒙開拓青少年義勇軍に生徒を積極的に送り出した。長野の教師たちは、戦争協力責任を明らかにしその歴史を繰り返してはならない、過去の問題ではない、として今も学び直している。

注5：INMPIは「平和のための博物館国際ネットワーク」の略称、2014年の開催は韓国のノグンリ、2017年はベルファスト（北アイルランド）で開催された。Mairead Maguire は、北アイルランド問題の平和的解決にあたり1976年度のノーベル平和賞を受賞。

注6：「50周年の集い」については岡村幸宣さんの『丸木美術館日記』（2017.10.28）が詳しい。

注7：高畑勲は、ちひろの絵本『あめのひのおするばん』に衝撃を受け、また映画「火垂るの墓」の制作では『戦火のなかの子どもたち』から多くを学んだという。2017年、自ら企画展「高畑勲がつくるちひろ展 ようこそ！ちひろの絵の中へ」を東京、安曇野ちひろ美術館で開催し、いわさきちひろを讃えた。